情報化時代における「知の創造教育」への警鐘

学長補佐
（キャンパスインテリジェント化担当）　村本 健一郎

本学の情報インフラの整備は長期計画に基づき進められている.第1期キャンパスインテリジェント化実施計画（平成17年度開始）に続き,今年度（平成22年度）から第2期がスタートした.情報基盤,研究環境,教育環境,学術情報,学生サービス環境,事務情報などの多方面にわたりきめの細かい整備を行ってきている.

情報ネットワークや電子技術が急速に進み多様化している状況下で,大学として必要な情報基盤を選択し整備することは,恒常的な戦略的課題であり,本学のみならず全国の大学や高等教育機関の共通課題といえる.

一方,情報化時代の教育は,両刃の剣の危うさも含んでいる.インターネット上には大学生向けのレポートの例や定期試験対策のサイトが数多く存在している.レポートを採点すると,明らかにインターネットから得た文章を切り貼りしたものが目立つようになってきた.単に文書のみならず,プログラムリストも掲載されており,極端な場合には内容を理解しなくても解（結果）が求まる.文章を推敲し書き直しを重ねることで思考力が向上し,何度もエラーが出てなかなか上手く実行できないという経験によりプログラムスキルが身に付くのであるが,昨今は検索の方法ばかりが上達しているようにも思える.コンピュータやインターネットを利用する教材も多数開発されている.これらはあくまでもツールとして提供されていることを利用者（学生）は理解しなければならない.

以前は知識や情報の大半を紙ベースの媒体（書籍,新聞,論文誌など）と電波（テレビやラジオ）から得ていたが,今やインターネットと電子媒体に替わりつつある.論文誌のほとんどは電子媒体により提供され,新聞の主要な記事もインターネットから入手できるようになった.唯一残っていた書籍についても,2010年はタブレット型情報携帯端末の登場により「電子書籍元年」といわれ,出版界も大きく変わる気配である.

キーボードを叩いて文書を作成するという行為自体にも問題がある.英語圏では手書きでもキーボードでも,単語の綴りは同じである.しかし,日本語の文章は漢字を主としており,大抵はローマ字変換を使ってキーボードを打つ.この差が極めて大きい.例えば,child と kodomo（子供）,school と gakkou（学校）を比較してみると,直接的な入力の英単語と変換による漢字との差は歴然としている.単に手書きで文章を書かないというだけに留まらず,安易さや効率を求める方向に流されていないか.思考力や創造力の低下が懸念される.

急激に変化している情報化時代に対応した「知の創造」に繋がる普遍的教育について,最高学府たる大学として改めて知恵を出すべき時にきていると考える.